

『ラクシュミー・タントラ』における創造説と グナ（性質）について

三澤 祐嗣

はじめに

ヒンドゥー教の主要な教義の一つであるヴィシュヌ派において、パーンチャラートラ派は、最も早期に成立したものの一つであり、タントラ的な要素を取り入れ、ナーラーヤナとしてのヴィシュヌ、及び神妃ラクシュミーを崇拝し、教義上 108 の聖典があるとされる。この派は、『マハーバーラタ』にも登場し、サーンキヤ思想などとも関係が深いものとして説かれている。ヴィシュヌ派の教理はこのパーンチャラートラ派に基づくとされ、パーンチャラートラ派自体は衰退したが、現在でも続くシュリー・ヴァイシュナヴァ派へと影響を与えるなど、後代への影響は疑いなく大きい。

『ラクシュミー・タントラ』(*Lakṣmītantra*、略号：LT)¹は、パーンチャラートラ派の主要な文献の一つであり、およそ 9 世紀から 12 世紀の間に編纂されたとされる。この書の主要なテーマの一つはパーンチャラートラ派独自の哲学と宇宙論であり、様々な思想を自由に取り入れ、折衷している。そして、様々な要素を統合するものとして、ヴィシュヌ派における母なる女神ラクシュミー（ヴィシュヌ・ナーラーヤナの妃）のシャクティ（宇宙の根源力）を最高の形而上学的原理に据えようとしているところにこの書の特徴が現れている。そのために、LT はパーンチャラートラ派のテキストの中で特別な地位を占めているのである。

LT の創造説では、グナ（性質）と呼ばれるものがいくつか登場するが、それぞれの内容が異なるので、本稿ではそれらについてまとめてみたい。

6 つの属性

それぞれの特徴

創造説は、「清浄な創造」(*śuddhasṛṣṭi*) と「不浄な創造」(*śuddhetarasṛṣṭi*) とに分かれる。第 2 章では、最高存在からの展開が説かれ、「6 つの属性（グナ）」がラクシュミー・ナーラーヤナあるいはブラフマンに帰される²。これらのうち、「知識」(*jñāna*) が本質であり、それ以外の 5 つは付随するものとされる。「6 つの属性」は次のようにまとめられる³。

1. 知識 (*jñāna*)：全てを知るものであり、全てを見るもの
2. 自在力 (*aiśvarya*)：自由自在に世界を創造する力、意欲、このために彼女の創造は妨げられない。
3. 潜在力 (*śakti*)⁴：世界の物質的根源(*prakṛti*)、シャクティによって、女神は世界の根源(*prakṛti*)となる。

4. 力 (bala) : 維持する力、結果 (創造されたもの=世界) を維持する。女神は「力」(bala) に
よって何の労もなく世界を創造する。潜在力 (śakti) の部分
5. 勇猛さ (vīrya) : 潜在力 (śakti) が変異しないこと (不変化力)、自在力 (aiśvarya) の部分
6. 光輝 (tejas) : 独存力 (協力者を必要としない力)、他者を支配下に置く能力 (他者支配力)

ヴューハ神の展開と6つの属性

ヴューハ神⁵と呼ばれる4神が段階的に顕現⁶することが説かれ、ヴァースデーヴァ→サンカルシャナ→プラディユムナ→ア Nil ッダとなる。それぞれ、「6つの属性」を全て組み合わせたものが1組、「6つの属性」が2つずつ組み合わさったものが3組となり、それぞれの神の属性として配置される。ヴァースデーヴァは、未だはっきりと現れていないため、形象を有しておらず、「6つの属性」をすべて有し、ブラフマンと不可分である⁷。それらをまとめると次のようになる⁸。

- ・ ヴァースデーヴァ : 「知識」(jñāna) ・ 「自在力」(aiśvarya) ・ 潜在力 (śakti) ・ 「力」(bala) ・ 「勇猛さ」(vīrya) ・ 光輝 (tejas)
- ・ サンカルシャナ : 「知識」(jñāna) ・ 「力」(bala)
- ・ プラディユムナ : 「自在力」(aiśvarya) ・ 「勇猛さ」(vīrya)
- ・ ア Nil ッダ : 潜在力 (śakti) ・ 光輝 (tejas)

6つの属性の2種の分類

「6つの属性」には、2種の分類が存在し、「自性」(svabhāva) と「3つのグナ」(guṇatraya) と呼ばれる。それぞれが「自性」(svabhāva) から流出 (upasarjana) し、両者から1つずつを有して一対の組み合わせを形成する。それらをまとめると次のようになる⁹ (前者が「自性」、後者が「3つのグナ」)。

- ・ 「知識」(jñāna) → 「力」(bala)
- ・ 「自在力」(aiśvarya) → 「勇猛さ」(vīrya)
- ・ 「潜在力」(śakti) → 「光輝」(tejas)

3つのグナから成るもの

LT第3章にいたると、「6つの属性」と別のグナが現れる。それらがサットヴァ、ラジャス、タマスからなる「3つのグナから成るもの」(traiguṇya) であり、サーンキヤ説の影響は明白であろう。これらの「3つのグナから成るもの」は、先にあげた「自性」と関連する。「自性」は、「清浄な創造」の段階において登場するものであり、「3つのグナから成るもの」とは明確に区別される¹⁰。「3つのグナから成るもの」は創造・維持・還滅を司り、「不浄な創造」の段階、すなわち現象世界の創造において現れる。それぞれの関連性は次の通りである¹¹。

- ・ 「知識」(jñāna) → サットヴァ → 維持
- ・ 「自在力」(aiśvarya) → ラジャス → 創造
- ・ 「潜在力」(śakti) → タマス → 還滅

3つのグナから成るものと神格

女神との関係

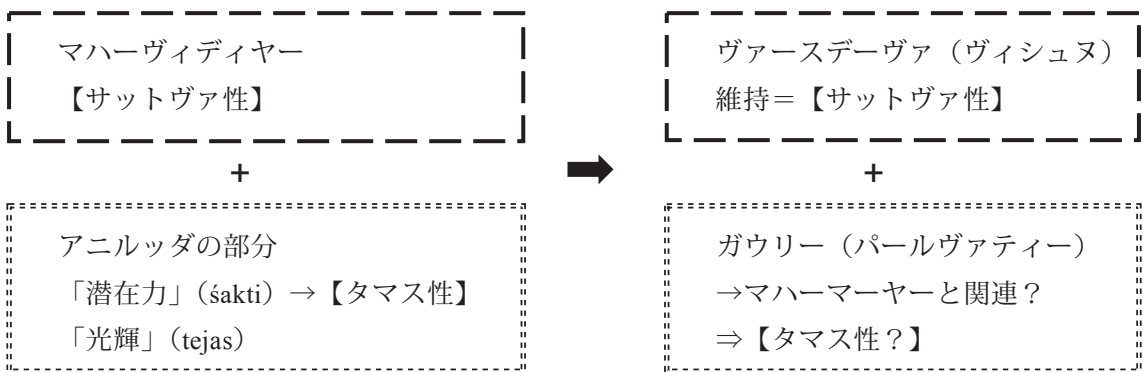
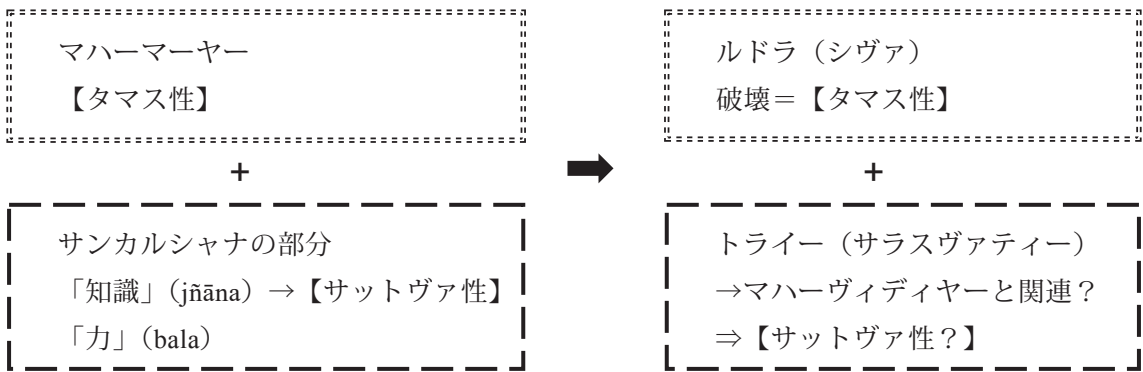
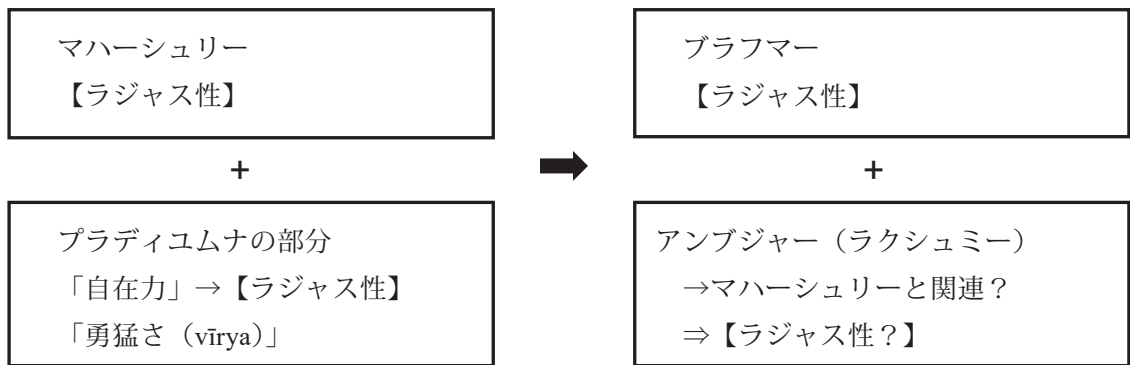
第4章、第5章においては、「3つのグナから成るもの」が創造説の中で女神と関連して説かれる。マハーラクシュミーは、世界を創造する際に顕れる姿であり、「3つのグナから成るもの」を有し、それらを支配するものとして説かれる¹²。さらに、「3つのグナから成るもの」がそれぞれ優勢になった状態としての女神が説かれる。それらは次のように説かれる¹³。

- サットヴァ性 → マハーヴィディヤー
- ラジャス性 → マハーシュリー¹⁴
- タマス性 → マハーマーヤー

3女神とヴェーハ神から生まれる男性神と女性神

3女神を根源とし、ヴェーハ神のうちの3神（サンカルシャナ、プラディユムナ、アニルツダ）の部分から、男性神と女性神の組み合わせが顕現する。それらは、創造・維持・破壊を司る神々である。そして、マハーラクシュミーの命令により、それぞれ、神話通りの配偶神となる。

ヴェーハ神の「6つの属性」を「3つのグナから成るもの」に置き換えて、女神との関連で考え、さらに、前述した創造・維持・還滅との関連についても考えると、マハーシュリー・ラジャス性から創造神ブラフマー・ラジャス性が生まれ、マハーマーヤー・タマス性から破壊神シヴァ・タマス性が生まれ、マハーヴィディヤー・サットヴァ性から維持神ヴィシュヌ・サットヴァ性が生まれるというように、3女神それぞれの性質を男性神が受け継いでいることが分かる。他方、女性神の異名やLT 5.21とLT 5.30を考慮すると、女性神と3女神との関連が窺える。すなわち、マハーシュリー（ラジャス性）とシュリー、マハーヴィディヤー（サットヴァ性）とトライー、そして、マハーマーヤー（タマス性）とガウリーである。やや強引ではあるが、それぞれの3種のグナを女性神と関連づけ、ヴェーハ神と転変する3種のグナに対応させてみると、プラディユムナ・ラジャス性とシュリー・サットヴァ性、サンカルシャナ・サットヴァ性とトライー・サットヴァ性、アニルツダ・タマス性とガウリー・タマス性、というように符合し、ヴェーハ神の部分の性質を女性神が引き継いでいると考えられる。それらをまとめると次のようになる¹⁵。



 サットヴァ性
 ラジャス性
 タマス性

おわりに

以上、LTの創造説とグナに関連する箇所を概観した。これらは、「6つの属性」と「3つのグナから成るもの」が複雑に融合されていることが分かる。「6つの属性」は、「清浄なる創造」において現れ、最高神、より正確に言えば、無形態の最高存在から現れたラクシュミー・ナーラーヤナの有する神的な属性であり、現象世界の創造とは直接的に関与しない。同じくグナの名を冠する「3つのグナから成るもの」が、その「不浄な創造」に関与するのである。これらは、サーンキヤ説での3種のグナで有り、その影響関係は今後の課題となろう。また、女神が3種のグナと関連し、創造・維持・破壊の神々とその配偶神が生まれ、それぞれ夫婦になる説は、『デーヴィー・マーハートミヤ』の6篇の付随書にも説かれ、その関連性が指摘されている¹⁶。ただし、『デーヴィー・マーハートミヤ』と異なり、LTでは、ヴェーハ神との関連が明示され、パーンチャラートラ派の創造説との整合性を持たせようとしている。しかし、このことも含め、様々な説を融合させていった結果、宇宙論はより長大で複雑になり、全体像の把握は困難を極める。より詳細にかつ関連文献の分析を進め、解明していく必要があるだろう。

参考文献

テキストと翻訳

Krishnamacharya, V. ed. (1959) *Lakṣmī-tantra: A Pāñcarātra Āgama*. Chennai: The Adyar Library and Research Centre.

Gupta, Sanjukta (2000) *Lakṣmī Tantra: A Pāñcarātra Text*. Delhi: Motilal Banarsidass.

二次資料

Mani, Vettam, 1975, *Purāṇic Encyclopaedia*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Rastelli, Marion (2009) “Pāñcarātra” in Knut A. Jacobsen (ed.), *Brill’s Encyclopedia of Hinduism*, Vol. 1. Leiden: BRILL, pp. 444-457.

Schrader, F. Otto, (1916) *Introduction to the Pāñcarātra and the Ahirbudhnya Saṃhitā*. Madras: The Adyar Library and Research Centre.

R.G.バンダルカル著; 島岩・池田健太郎訳 1984 『ヒンドゥー教——ヴィシュヌとシヴァの宗教』せりか書房。

小倉泰・横地優子 (2000) 『ヒンドゥー教の聖典二篇』東洋文庫

橋本泰元・宮本久義・山下博司 2005 『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版。

引田弘道 (1997) 『ヒンドゥータントリズムの研究』山喜房佛書林

三澤祐嗣 (2013) 「『ラクシュミー・タントラ』第1章訳註」『東洋大学大学院紀要』第49巻, pp. 129-150.

三澤祐嗣 (2014) 「『ラクシュミー・タントラ』第2章訳註」『国際哲学研究』第3号, pp. 175-186.

三澤祐嗣 (2016) 「『ラクシュミー・タントラ』第3章訳註」『国際哲学研究』第5号, pp. 193-202.

註

- ¹ 本稿では、Krishnamacharya 氏による校訂本を使用した[Krishnamacharya 1959]。LT の翻訳としては、唯一の英訳が Gupta 氏により発表されている[Gupta 2000]。同書には LT の概略についても述べられている。
- ² nistarāṅgāmṛtāmbhodhikalpaṃ śāḍguṇyam ujjalāṃ /
ekam taccidghanaṃ śāntam udayāstamayojjhitam // LT 2.10
〔ブラフマンは〕 夙いだアムリタ（不死の靈薬）の海と等しいものであり、6つのグナが集合したものであり、輝くものである、その唯一の最高精神（cidghana）は、静寂であり、生起と消滅から離れている。
jñānātmikā tathāhamtā sarvajñā sarvadarśinī /
jñānātmakam paraṃ rūpaṃ brahmaṇo mama cobhayoh // LT 2.25
同様に、「わたし性」（ahamtā）の「知識」（jñāna）の本質は、全てを知るものであり、全てを見るものである。ブラフマンとわたしの両者の「知識」（jñāna）の本質は最高の形態である。
śeṣam aiśvaryavīryādi jñānadharmaḥ sanātanaḥ /
aham ity āntaraṃ rūpaṃ jñānarūpaṃ udīryate // LT 2.26
他の「自在力」（aiśvarya）や「勇猛さ」（vīrya）などは「知識」（jñāna）の特質（属性、dharma）であり、永遠である。「知識」（jñāna）の形態は、わたし（aham）という固有の形態であると言われている。
- ³ avyāhatir yad udyatyās tad aiśvaryaṃ paraṃ mama /
iccheti socyate tattattattvaśāstreṣu paṇḍitaiḥ // LT 2.28
生起する（udyati）〔わたし〕は妨げられない（avyāhati）、それがわたしの最高の自在力（aiśvarya）である。それは意欲（icchā）であると、あらゆる真理〔が説かれる〕シャーストラ（聖典）において、賢者たちによって語られている。
jagatprakṛtibhāvo me yaḥ sā śaktir itīryate /
srjantyā yac chramābhāvo mama tad balam iṣyate // LT 2.29
世界の物質的根源（prakṛti）としてのわたしの状態が「潜在力」（śakti）であると言われている。わたしは創造しながらも疲れることはない、それが「力」（bala）であると考えられている。
bharaṇaṃ yac ca kāryasya balaṃ tac ca pracakṣate /
śaktyaṃśakena tat prāhur bharaṇaṃ tattvakobidāḥ // LT 2.30
結果（創造されたもの）の維持、それもまた「力」（bala）と言っている。
真理を体得した者たちは、その維持を「潜在力」（śakti）の部分として説明する。
vikāraviraho vīryaṃ prakṛtitve 'pi me sadā /
svabhāvaṃ hi jahāty āśu payo dadhisamudbhave // LT 2.31
わたしは世界の物質的根源（prakṛti）であるけれども、常に変異しない（変異から離れている）、〔それが〕「勇猛さ」（vīrya）である。なぜなら、牛乳は、ヨーグルトに変わるとき、自己の性質を直ちに捨て去る。
jagadbhāve 'pi sā nāsti vikṛtir mama nityadā /
vikāraviraho vīryam atas tattvavidāṃ matam // LT 2.32
しかし、世界の存在において（世界が出現しても）、わたしにとってそれ（シャクティ）は永遠に変化しない。それ故、変異しない（変異から離れている）ことが「勇猛さ」（vīrya）であると、真理を知る者たちは理解している。
kramaḥ kathito vīryam aiśvaryāṃśaḥ sa tu smṛtaḥ /
sahakāryanapekṣā me sarvakāryavidhau hi yā // LT 2.33
「勇猛さ」（vīrya）は勇敢さ（vikrama）であると語られ、さらに、それは「自在力」（aiśvarya）の部分（要素）であるとも言われる。わたしはあらゆる行為の法則において共に行動するもの（sahakārin）とは関わりがない。
tejaḥ śaṣṭhaṃ guṇaṃ prāhuḥ tam imaṃ tattvavedinaḥ /
parābhibhavasāmarthyam tejaḥ kecit pracakṣate // LT 2.34
これこそを6番目のグナ（属性）である「光輝」（tejas）であると、真理を知る者たちは言う。「光輝」

(tejas) は、他者を支配下に置く能力であると、ある者たちは述べる。

- 4 ラクシュミーはシャクティとも呼ばれるが、しかしながら、6つの属性の中にも、シャクティが見られる。そのため、シャクティにはおそらく2つの側面があると考えられる。ラクシュミーそのものとしてのシャクティ（宇宙の根源力）と6つの属性の一つとしてのシャクティ（「潜在力」）である。
- 5 サンカルシャナは別名バラバドラとも呼ばれ、ヴァースデーヴァの兄である。また、プラディウムナとアニルッダはそれぞれヴァースデーヴァの息子と孫である。ヴェーハの神格は、上記の4名にサーンバを足した、ヴリシュニ族の5人の英雄が元になっているとされるが、いつのころからかサーンバは除外され、ヴァースデーヴァを頂点とするヴェーハが形成されたという[Rastelli 2009: 444]。
- 6 Gupta 氏はヴェーハについて、「清浄なる創造と不浄なる創造の違いは、3つの現象の属性、サットヴァ、ラジャス、タマスが、清浄なる創造において存在していないのであり、その清浄なる創造は時折 nityavibhūti と呼ばれ、反対に不浄なる創造は līlavibhūti と名付けられる。前者は4つの顕現 (caturmūrti あるいは caturvyūha) から成る。これら4つの顕現 (ヴェーハ) の最初 (すなわちヴァースデーヴァ) において、属性は休止状態であり、それ故、うっすらと顕現しているのみである。顕現が進行するにつれ、それらはより輝き、深淵となる。」と説明している[Gupta 2000: 11]。
- 7 ここでは、4つのヴェーハ神の中で最初のものがヴァースデーヴァと明言されていないが、ナーラーヤナの異名としては説かれているため、ラクシュミー・ナーラーヤナと不可分の存在と思われる。
- 8 vyaktajñānabalākhyāyām pūrvam samkarṣaṇātmani /
tilakālakavat sarvo vikāro mayi tiṣṭhati // LT 2.45
tan mām samkarṣaṇātmānam vidur jñānabale budhāḥ / LT 2.46ab
まずはじめに、わたしの「知識」(jñāna) と「力」(bala) の顕現と呼ばれるサンカルシャナの本質 (アートマン) の中に、(皮膚の下の) ほくろのごとくに、すべての変異 (vikāra) が存在する。かのわたしであるサンカルシャナの本質を、「知識」(jñāna) と「力」(bala) であると、知者たちは認識する。
svayam grhṇāmi kartṛtvam unmiṣantī tataḥ param // LT 2.46cd
pradyumna iti mām āhuḥ sarvārthadyotanīm tadā /
yugam prasphuritam rūpam tasminn aiśvaryavīryayoḥ // LT 2.47
それから、[わたしは] 開眼 (顕現) しつつ、作者性を自らに獲得する。その時、すべての対象を輝かせるわたしをプラディウムナと言う。そこにおいて、「自在力」(aiśvarya) と「勇猛さ」(vīrya) の組み合わせの形態が現れる。
tatas tayā kriyāśaktiyā labdhāveśā cikīrṣayā /
yujyamānāniruddhākhyām lambhitā tattvakovidaiḥ // LT 2.48
それから、その活動力 (kriyāśakti) によって浸透され、[また] 活動の意欲と結びついたものがアニルッダという名称で真理を体得した者たちによって呼ばれる。
tatra tadguṇayugmam tu mama rūpatayocyate /
ato jñānabale devaḥ samkarṣaṇa udīryate // LT 2.53
aiśvaryavīrye pradyumno 'niruddha śaktitejasī / LT 2.54ab
さて、そこにおいて、そのグナの一対 (組み合わせ) が、わたしにとって形態性 (形あるもの) として、語られる。それ故、「知識」(jñāna) と「力」(bala) [の組み合わせ] である神は、サンカルシャナと述べられる。「自在力」(aiśvarya) と「勇猛さ」(vīrya) [の組み合わせ] がプラディウムナであり、「潜在力」(śakti) と「光輝」(tejas) [の組み合わせ] はアニルッダである。
- 9 tisro mama svabhāvākhyā vijñānaiśvaryāśaktayaḥ // LT 2.49cd
unmiṣantyaḥ pṛthaktattvatrayeṇa parikīrtitāḥ / LT 2.50ab
3つのわたしの自性 (svabhāva) と呼ばれるものは、「知識」(vijñāna=jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti) である。[それらの自性は] 開眼 (顕現) しつつあり、原理 (tattva) の3種の区分として言及される。
balam vīryam tathā teja ity etat tu guṇatrayam // LT 2.50cd
śramādyavadyābhāvākhyam jñānāder upasarjanam /

ittham śāntoditāvasthādavyabhedajuṣo mama // LT 2.51

他方、「力」(bala)、「勇猛さ」(vīrya)、そして「光輝」(tejas)というこの3つのグナ (guṇatraya) がある。〔それら3つのグナ(属性)は〕疲労などの不完全さは存在せず、知識(jñāna)などの流出(upasarjana)である。このように、わたしにとって、平安なるものから生じた状態は2種の区別を持つものである。

¹⁰ adhiṣṭhāya guṇān sṛṣṭisthitisamhṛtikāriṇī /

nirguṇāpi guṇān etān adhiṣṭhāyātmavāñchayā // LT 3.9

cakram pravartayāmy ekā sṛṣṭisthityantarūpakam / LT 3.10ab

創造・維持・還滅を行う者〔であるわたし〕は、諸々のグナを支配し、また、グナを持たない者〔であるわたし〕は、自分の望みによって、これら諸々のグナを支配する。そして、唯一なるわたし(ラクシュミー)は、創造、維持、還滅(終わりを形作るもの)の循環(チャクラ)を廻らす。

創造・維持・還滅を行う者(sṛṣṭisthitisamhṛtikāriṇī)とは、これらの循環を支配し、それらを超えた存在であることが示唆されている。また、グナを持たない者(nirguṇā)とは、ここでのグナはサットヴァ、ラジャス、タマスからなる3種のグナという物質的要素の機能を有するものであり、それを持たないということはプルシャの機能をも示唆している。Krishnamacharya の註には、「〈また、グナを持たない者〔であるわたし〕は〉(“nirguṇāpi”)とは、すでに6つのグナに関して言われたことから、グナかを持たない(nirguṇa)という語とはサットヴァ、ラジャス、タマスの形態(性質)が混ざったグナから離れているという意味である」(“nirguṇāpīti. pūrvaṃ śāḍguṇasyoktatvāt atra nirguṇapadasya sattvarajastamorūpamiśraguṇarahitety arthah.” [Krishnamacharya 1959: p. 11])と説明される。これらはいずれもラクシュミーのことであり、本来ヴィシュヌが持つ最高神の機能がラクシュミーに帰されているのである。

acicchaktir jaḍāpy evam aśuddhā pariṇāminī /

triguṇāpi mamaivedaṃ svācchandyāt pravijṛmbhitam // LT 3.27

また、「無知としてのシャクティ」(acit-śakti)は、同様に、理性なきものであり、不浄であり、転変するものであり、さらに3種のグナ〔から成るもの〕である。〔しかし〕まさにわたしのこれは、自身の意欲(svācchandya)により、伸張したもの(遍く広がったもの=顕現したもの)である。

¹¹ svasvātantryavaśenaiva vibhāgas tatra vartate /

vijñānaiśvaryaśaktyātmā vibhāgo yaḥ sa īritah // LT 3.3

自己の意欲(svātantrya、独立性)によってのみ、〔グナの〕区別(vibhāga)は、そこに生じる。〔グナの〕区別は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti)から成るということ、それが言われた。

vijñānaiśvaryaśaktīnām unmeṣas tv aparo 'dhunā /

atarkeyā mamodyatyā niyogānarhayā sadā // LT 3.4

icchayānyat kṛtam rūpam āsī jñānādike trike // LT 3.5ab

しかし、今、開眼(unmeṣa)は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti)とは別である¹¹。常に、推し量れない者であるわたしの自由自在な生起(創造)の意欲(icchā)によって作られた別の形態は、「知識」(jñāna)などの3種の中に存在する。

yathavekṣurasah svaccho guḍatvaṃ pratipadyate // LT 3.5cd

tadvat svaccham ayaṃ jñānaṃ sattvatāṃ pratipadyate /

rajastvaṃ ca mamaīśvaryaṃ tamastvaṃ śaktir apy uta // LT 3.6

まさに、澄んだサトウキビの汁が糖蜜性を獲得するように。そのように、この澄んだ「知識」(jñāna)は、サットヴァ性を獲得する。そして、わたしの「自在力」(aiśvarya)はラジャス性を、そしてまた〔わたしの〕「潜在力」(śakti)はタマス性を〔獲得する〕。

ete trayo guṇāḥ śakra traiguṇyam iti śabdyate /

rajaḥpradhānaṃ tat sṛṣṭau traiguṇyaṃ parivartate // LT 3.7

シャクラよ。これら3つのグナは、3つのグナから成るもの(traiguṇya)と呼ばれる。その3つのグナから成るもの(traiguṇya)は、創造において、ラジャスが第1のもの(優勢)となる。

sthitau sattvapradhānaṃ tat samhṛtau tu tamomukham /

aham saṁvinmayī pūrvā vyāpiny api purāṁdara // LT 3.8

それ（3つのグナから成るもの）は、維持において、サットヴァが第1のもの（優勢）に、一方、還滅において、タマスが前面（優勢）に〔なる〕。わたしは、「知」（saṁvid）からできている者であり、最初の者であり、遍充する者である。プランダラ（城塞の破壊者＝インドラ）よ。

¹² anujjitasvarūpāhaṁ madīyenālpabindunā /

mahālakṣmīḥ samākhyātā traiguṇyaparivartini // LT 5.3

わたしは、不変の（減少することのない）自性を持ちつつ、自身の極微なものとして、マハーラクシュミーと呼ばれ、〔また〕3種のグナからなるもの（traiguṇya）を展開する者である。

¹³ rajahpradhānā tatrāhaṁ mahāśrīḥ parameśvarī /

madīyaṁ yat tamorūpaṁ mahāmāyeti sā smṛtā // LT 5.4

その中で、ラジャスが優勢である〔場合の〕わたしは、マハーシュリーであり、パラメーシュヴァリーである。わたし自身がタマスの形を取ることににより、それはマハーマーヤーであると言われる。

madīyaṁ sattvarūpaṁ yan mahāvidyeti sā smṛtā /

aham ca te ca kāmīnyau tā vayaṁ tisa ūrjitāḥ // LT 5.5

わたし自身がサットヴァの形を取ることににより、それはマハーヴィディヤーであると言われる。わたしとその2人の女性であるそれらのわたしたちは、3つの力強きものである。

¹⁴ ラジャス性のマハーシュリーとマハーラクシュミーとは別の存在であると考えられている。しかし、LT 4.36によると創造においてはラジャスが優勢になるとされ、さらにLT 4.39では、マハーシュリーはマハーラクシュミーの異名とされる。おそらく「3つのグナから成るもの」を有する女神の形態としては同性質ではあるが、その現れ方の違いを示している者と思われる。「3つのグナから成るもの」のうちラジャスが最初に説かれたり、マハーシュリーとマハーラクシュミーが同一視されたりと、ラジャスが重要視されていることが見て取れる。それは、活動や刺激の性質であるラジャスが、創造において重要な役割を担っているためと考えられる。

¹⁵ madīyaṁ mithunaṁ yat tan mānaṣaṁ rucirākṛti // LT 5.6cd

hiraṇyagarbhaṁ padmākṣaṁ sundaraṁ kamalāsanam /

pradyumnāṁśād idaṁ vidhi saṁbhūtaṁ mayi mānaṣam // LT 5.7

わたしの組み合わせというもの、それは精神性のものであり、壮麗なる形態である。〔その組み合わせとは〕黄金の胎児（hiraṇyagarbha）、蓮華の目（padmākṣa）、凛々しいもの（sundara）、蓮華に座すもの（kamalāsana）であり、これを、わたし（マハーシュリー）における精神性のものであり、プラディユムナの部分から生まれるものと知れ。

dhātā vidhir viricīś ca brahmā ca puruṣaḥ smṛtaḥ /

śrīḥ padmā kamalā lakṣmīś tatra nārī prakīrtitā // LT 5.8

〔そこにおいて〕男性（puruṣa）は、ダーター（dhātā、創造者）、ヴィディ（vidhi、規則）、ヴィリンチ（virīñci）、ブラフマー（brahmā）と言われる。〔他方〕そこにおいて、女性（nārī）は、シュリー（śrī、吉祥）、パドマー（padmā、蓮華）、カマラー（kamalā、蓮華）、ラクシュミー（lakṣmī、幸運）と呼ばれる。

saṁkarṣaṇāṁśato dvandvaṁ mahāmāyāsambhavam /

trinetaṁ cārusarvāṅgaṁ mānaṣaṁ tatra yaḥ pumān // LT 5.9

sa rudraḥ śaṁkaraḥ sthāṇuḥ kapardī ca trilocanaḥ /

tatra trayīśvarā bhāṣā vidyā caivākṣarā tathā // LT 5.10

kāmadhenuś ca vijñeyā sā strī gauś ca sarasvatī / LT 5.11ab

サンカルシャナの部分から〔生まれ〕、マハーマーヤー（タマス性）を根源とする組み合わせは、3つ目のもの（trineta）、美しい全身を持つもの（cārusarvāṅga）であり、精神性のものである。そこにおいて男性（pums）であるもの、それは、ルドラ（rudra、咆えるもの）、シャンカラ（śaṁkara、吉兆のもの）、スターヌ（sthāṇu、堅固なもの）、カパルディー（kapardī、螺旋のもの）、トリローチャナ（trilocana、3つの目を持つもの）である。そこにおいて〔女性は〕、トライ（trayī、幸せな女性）、イーシュヴァラー（īśvarā、主宰するもの）、バーシャー（bhāṣā、言葉）、ヴィディヤー（vidyā、知）、そしてアクシャラ

ー (akṣarā、不滅なるもの) であり、さらにその女性 (strī) は、カーマデーヌ (kāmadhenu、如意牛)、
ゴー (go、雌牛)、サラスヴァティー (sarasvatī) であると知られるべきである。

aniruddhāṃśasambhūtaṃ mahāvidyāsamudbhavam // LT 5.11cd

mithunaṃ mānaśaṃ yat tat puruṣas tatra keśavaḥ /

viṣṇuḥ kṛṣṇo hr̥ṣīkeśo vāsudevo janārdanaḥ // LT 5.12

umā gaurī satī caṇḍā tatra strī subhagā satī / LT 5.13ab

ア Niludda の部分から生まれ、[そして] マハーヴィディヤー (サットヴァ性) を根源とする組み合わせは、精神性のものであるから、まさにそこにおいて男性 (puruṣa) は、ケーシャヴァ (keśava、豊かな髪を持つもの)、ヴィシュヌ (viṣṇu)、クリシュナ (kṛṣṇa)、フリシーケーシャ (hr̥ṣīkeśa、感覚器官を統御するもの)、ヴァースデーヴァ (vāsudeva)、ジャーナルダナ (janārdana、人々を乱すもの) である。[他方] そこにおいて、ウマー (umā)、ガウリー (gaurī、白く輝くもの)、サティー (satī、貞節なるもの)、チャンダー (caṇḍā、獐猛なるもの) である女性 (strī) は、幸福で貞節である。

brahmaṇas tu trayī patnī sā babhūva mamājñayā // LT 5.13cd

rudrasya dayitā gaurī vāsudevasya cāmbujā /

rajasas tamasas caiva sattvasya ca vivartanam // LT 5.14

わたし (マハーシュリー) の命令によって、トライーはブラフマーの妻となった。[さらに] ガウリーはルドラの妻に、そしてアンブジャー (ambujā、蓮華=パドマー) はヴァースデーヴァの [妻になった]。そしてまさに [これが]、ラジャス、タマス、サットヴァの展開である。

¹⁶ [小倉・横地 2000: pp. 271–272]